

派遣期日：平成17年10月3日～12月16日  
派遣者：原子核工学専攻博士後期課程1年 熊谷 裕司  
派遣先：国際原子力機関（IAEA）、ウィーン、オーストリア

国際原子力機関（IAEA）において、東京工業大学21世紀COEプログラムのCOE-INESキャプテンシップ教育プログラムの一環として、国際原子力機関（IAEA）インターンシップに参加した。IAEAは、原子力の平和的利用を促進するとともに、原子力が平和的利用から軍事的利用に転用されることを防止することを目的として、1957年7月29日に発足した。私は2006年1月より、東京工業大学の交換留学生として、現在共同研究を行っているイタリアの大学に派遣されることが決まっている。その際にIAEAによって進められているCRP（Coordinated Research Project）に携わる研究を行う予定がある。本インターンシップへの希望動機は、そのCRPに関する基礎を学ぶことと、IAEAの実際の職務に携わり多くの経験を積み重ねることで、帰国後の研究や将来のために役立てたいという事であった。

IAEA本部は、永世中立国であるオーストリアの首都ウィーンの国連ビル群の一角にある。私は初め、ウィーンに着いたときに、ウィーンの街の建築物に対する執着のすさまじさが目に付いた。宮殿や教会はもとより、アパートの壁画や内部のエレベーターにいたるまで、街中美に溢れていた。またモーツァルトやベートーヴェンなど優れた音楽家達や、クリムトやエゴン・シーレなど有名な芸術家達を輩出したことでも非常に有名であり、来年モーツァルト・イヤー（生誕250年）を迎えるにあたり、ウィーンの街は非常に活気づいていた。

私が配属されたのは、Safety Assessment Section, Division of Nuclear Installation Safety, Department of nuclear Safety and Securityであり、課長のMr. M. EL-Shanwany、SupervisorのMs. I. Kouzminaの指導の下、アジアの原子力プラントにおける確率論的安全性評価（PSA）の手法、結果、その応用に関する情報を集め、それらを比較・調査するという仕事をいただいた。IAEAは現在、将来の活動を支えていくため、各国の原子力プラントのPSAの現状を調査している。実際、ヨーロッパの原子力プラントにおけるPSA情報の収集は既に行われており、私のタスクは、アジアの原子力プラントに焦点を絞り、それらのPSA情報の比較・検討をするという事になった。アジアの原子力プラントにおけるPSA情報を集めるために、様々な参考文献やこれに関するWEBサイトから収集し、包括的にアジアのPSA情報のリストを作成し、それを比較・検討し、報告書をまとめた。とりわけ注目すべき事項として、日本ではPSAデータを一般に公開するにあたり他国に比べより敏感であり、それは私が集めた情報に加え、韓国、日本、中国の原子力各社に行ったアンケートの結果からも見てとれた事である。

また本インターンシップを通して、将来のための有益な多くの経験をした。まずは、英語での正式な報告書の書き方・発表の行い方を学んだ。実際、共同研究者等いなかったため、自身で一から十までレポートをまとめ、発表資料を作成し、最終日にその報告会を行う必要があり、それらに関する多くの事を学ぶ事が出来た。二つ目としては、IAEA主催で行われるいろいろなミーティングに参加し、IAEAが行っている仕事を体験できた事。IAEAでの仕事は、日本の大学や研究機関、メーカーが行っているようなものとは違い、研究というよりはむしろ、今まで培ってきた知識を用いミーティング等を開き、世界の原子力の基準を決め、取りまとめる事が主な仕事であると感じた。三つ目としては、世界中の安全性解析の専門家と共に仕事を行い、彼らから多くの知識・情報を吸収することが出来た事である。これらの経験は、今後国際的な原子力技術者を目指す私にとって、有力な財産になっていくと思う。

今回のIAEAインターンシップにおいて特筆すべき出来事として、IAEA約50年の歴史においてもっとも名誉ある賞、ノーベル平和賞が、IAEAと



写真1 ウィーンの国連ビル群



写真2 エルバラダイ氏のノーベル賞授与報告会

その事務局長であるムハンマド・エルバラダイ氏（63）に我々のインターンシップ中に授与された事である。ノーベル賞受賞者が発表された日、IAEAのビル内には、「本日の避難訓練を中止し、エルバラダイ氏のスピーチがある」との緊急放送が流れ、エルバラダイ氏からIAEA職員全体にメールが送られた。「核エネルギーの軍事利用の防止に努めた」というのが授賞理由であるが、これはIAEAが原子力の平和利用と核不拡散に果たしてきた役割の重さを考えると、十分に受賞に値するものだと私は考える。しかしながらエルバラダイ氏のスピーチにもあったが、国際社会を取り巻く核の脅威の現実に目を向けると、これからのIAEAの活動に多大な困難が立ちふさがっていることを憂慮せざるを得ない。その意味で、この度の受賞はIAEAとエルバラダイ氏に今後の期待を求める意味も含まれていると思う。実際、私のインターン任期中に開かれたイランの原子力エキスパートの人々を招いて行われたワークショップの際に、アメリカのエキスパート達は出席の依頼を皆、断ったという話を聞いた。今回のIAEAへの平和賞の授与は、単独行動主義を取り続ける米国をけん制することも今回の受賞の大きな意味を持っていると考える。

またエルバラダイ氏のスピーチを通して、私は、その内容に加えて彼のユーモアな人柄にも注目した。同氏のスピーチは実際、多くの人の興味を引く内容であり、私も同氏の冗談を交えた興味のある話から学ぶことは多いと感じた。もちろん私が彼の演説をそのまま真似する必要はないと思うが、これから世界の舞台で活躍していく際に私の発表等の仕方を改善していく必要があると感じた。

私にとって本インターンがこの様な素晴らしい経験になったのは、多くの人の協力があつたからである。現地では、お世話になった同部署の専門家の皆様をはじめ、部署の秘書の方々には日常生活でもお世話になり海外生活における精神的な支えにもなっていた。また、私が所属した原子力安全局の谷口事務次長を初めとする邦人職員の方々にも、様々な経験・機会を与えていただ



写真3 部署でのフェアウェルパーティにて

いた。最後に、私が国際舞台に出るための大きな一歩であるこの様な機会を与えて下さった、齊藤先生、山野先生、COEスタッフの方々に、この場を借りて感謝を致します。